

るのをや何にもないので疲れた手で土を掘つてゐる人死に瀕した幼子を抱いて泣き
なやう歩いてゐる人夫人は道路に倒れ虫の息見るも聞くも敗戦の悲しきよ
城津へ行けば何んとかなると城津へ急ぐ

何もその積りでゐるのでせう夕暮城津着いた鐵道の寮へ泊る事に成り旅の
疲れを休める既に幾萬人の群れで廊下に寝る着いたばかりで場計も定まらず外
で待つて居る内に私達の組の娘さんかソノ中に居て行かれた噂には聞いてゐたや
こんなに身近に迫つて居ようとは思はなかつた

恐ろしさに夜は食も通らないう直暗な廊下で折重なり寝るともつがず坐つてゐたや疲
れの為に右もつてゐたのでせう突然階上で女の悲鳴と助けると叫ぶ声に眼が覚
める男の唸る声赤子の泣叫ぶ声ソノ軍と直感したあゝ恐ろしい事を身体中ふるへて止ま
らぬ朝起きて見ると殆どみどりの黒髪を切つて男装して逃げ隠れして居る

畫るでもでも音屋に未だ荷物を荒す城津では生きていた地はしなかつた母は兄の家に先
に行きたつとつと旅の疲れといやあつと思ふ兄の家に行って見るとやはり半島人に
襲はれて備わ團生活をしてゐた空いた官舎に入れて貰ふ風呂を沸して始めてホツとする
恐ろしい事も考へず温かいオンドルで寝る事が出来た今度には汽車で南下しよう
元山まで来たや二再び感興へ度これ鐵道養生科へ收容されてしまふ

お時の日憧れの日本に帰れる事だせうそれまで元氣なつた子供が一死に二人死に次々と病氣
懼り哀れ幼子はこゝろで歩いたあもなく死んでゆく

一晩の内に一軒の家から二人年若くも有るとき親の氣持どんなでせう家に居れば充分な事
事も出来温かい針で養生出来るものを安しく見殺しにせねばならぬ

懼り哀れ幼子はこゝ迄で歩いた處もなく死んでゆく

一晩の内に一軒の家から二人毎人少くも有るとき親の氣持とんなでせう家には居れば充分なま
事も出来温い針で養生出来るものを等しく見殺しにせねばならぬ

母が足が立てなくなり頃のでも判らぬきつと無理をした為でせう医者にみせても
葉はなくあつたとしても言償で手がでないもうお金をもつて米は食べられず高梁

ばかりの搦をすつて居た。

羊島人の家に馴れぬ米搗に行き野菜残飯を貰つておさぼる術に食べた働く人が

多のでアッして帰る方が多い其の内克子が病氣になつて一番恐れ了事だが仕方が

ない私しばかりではない幾百萬の親か我子も失はない者は一人もないのだ

克子お前には氣毒だが婆ちゃんの代になつてくれ婆ちゃん丈はどうしても内地の土を

踏ましてやりたいやうと心の内で頼んだどうせ助からない命なら一日も早く引取らせて

下さいと神林に祈つた。

母と克子の在話で多たな日か孫さへ坐るいまもないあわたいしい日のみ續く克子の

死も近づいたか今百中は丈夫と思ひ洗濯をしてゐたら松子が変だとの知らせに窓

から飛び込で入つて見ると既に母の顔を見る事も出来ず——静かに眼玉とぢた。

忘れる事の出来な昭和式拾遺十二月十六日

克子よ永遠にさなら克子よ本当に婆ちゃんに代になつてくれたお苦しかつたでせう

でも樂になつたねこれ先母ちゃん達の苦難は何時迄でつくかまだ辛く辛い思ひを

しなくてはなないお前が居ては辛く辛い思ひをするばかりだ

たれる事の出幸な、昭和式格、十二月十二日

克子よ永遠にさなら、克子よ本学に婆ちゃんの代になつてくれたね、苦しかつたでせう、でも奥になつたね、これ先母ちゃん達の苦難は何時迄でつゝか、まだ辛く辛い思ひをしなくては、ないお美、か、居ては、辛く辛い思ひをするばかりだ、

おにいに行けば、お友達や澤山待つるから、仲良く遊ぶのだよ、と、つかりと抱きしめて最後の別れを惜んだ、母も大声で泣いてゐる、家にゐたら、こんな悲しい目に逢はなつても、良いものさ、これ、お運命と諦めて、生きた氣に、父の赤い水兵服を着

せ、青い帽子を被せさせた、また私には、六の子供が有る、幾人居ても皆笑した人さへある、それを思へば、諦めるより、仕方がない、貧苦と周囲の盛迎に、日夜悩まされ、早や十二月になる、

母は、食も良く、血色は良いのだが、立てない、寒さに、ふるへて居る、七輪を入水してやる、や、寒いらしい、お夢相に、七十年も苦勞して、こんな哀れな目に逢せて、申訳ない、せめてお美でもあつたら、お美、味い物を、たべさせるのに、どうして、こゝろも不孝な

お母さんなので、せう無理をしてお餅を買つて、子供にもやらす、食べさせた時、あ、うまかつた、お美、に、苦勞を、かけて、済まない、と、い、通、した、

死を以て、包み荒なわで、結び、まるで、魚、か、何にかの、柄に、運ばれるのを見て、死にたくはない、内地に、帰る、道で、死に、きれない、といふ、て、居る、が、私、の、目、で、見、ても、駄目、だ、と、思、つ、て、居、る、生、活、難、で、遂、に、通、帳、を、四、割、で、羊、島、人、に、う、り、や、つ、と、白、い、お、飯、を、食、べ、させ、色、々、買、つ、た、た、べ、させ、たら、と、も、七、人、だ、あ、の、顔、運、命、は、と、う、く、親、子、を、引、離、す、日、が、来、た、十、二、月、一、日、夜、八、時、頃、養、生、科、より、二、千、名、富、坂、へ、疎、開、命、令、が、ソ、軍、より、下

ない内地に帰る迄で死にきねないといふて居るが、私しの目で見てもとても駄目だと
思つて居る生活難で遂に通帳を四割で羊島人にうりやつと白い飯を食べ
させ色々買つてたべさせたらうともいふれんがあの顔運命はとうとう親子を引離
す日が来た十二月一日夜八時頃養生所より二千名宮坂へ疎開命令がソ軍より下
り明朝八時迄に集合の人選に入つた今此の母を置いてどうして行かれぬといつてどう
して連れ行かれぬ宮坂ははこよりまだ悪條件の所ときいて居る
兄達の方も皆病氣で男子二人を連れて居る丈でも仕方ないので、辭ける事にした
残る姉に頼んで見たがソ軍の命令で如何ともする事が出来な
最後の別れうしろ髪ひかる、思ひ長く居てもたいては泣けるだけ、逃げる姉に驛へと急ぐ
粉雪の降る寒いく、日貨車にゆられ夕方宮坂に着いた

羊道ばかり留の中を行くと荒果てた兵舎が見えた壁は落ちガラスは破れ人間の
位も家ではない屋根が有るといふ丈の宮火の氣はなし其の為に大令死んで行
く人が出来たここに十月まで日本軍が居たと云い、なつかしかつた

寒さと飢餓に何時迄こゝで暮らすことやり病人は増へるばかり死人は續々と一日平的
十人の死体やでる有荷で私達のまはりは病人ばかり今の処置は異様に遅
て居るか、満足に生きることが出来ないと覚悟はしてゐた

十二月二十日から保安隊の命令で二里余の山に作業を止め二人で毎日働か
し通ひのこゝまで入る雪土押合けて作業夜は直暗な所で寒さにふるへ乍ら一睡も
出来ぬ夜もある